

月報 第451・452号(第2版)

2000年1・2月 東京バッハ合唱団

〒156-0055

東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel:03-3290-5731 Fax:03-3290-5732

E-mail:bachchor.tokyo@aol.com

<http://www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor/>

バッハ・カンタータ日本語版 楽譜の発行

東京バッハ合唱団では、バッハ没後 250 年記念の特別企画として、本年 5 月から、日本語訳詞付きのバッハ教会カンタータ楽譜選集を出版します。

代表作 50 曲を選び、年に 10 曲ずつ、5 年で完結

この企画は、なによりも、わが国でのより幅広い層への「バッハ・カンタータ」の普及を目的とします。念頭にあるのは、教会の聖歌隊がピアノ伴奏のみで演奏したり、アマチュアや学生の合唱団が小編成の室内楽とともに公演するときの使用です。

従って、主として私たちが過去 38 年間に日本語で上演してきた約 100 曲のカンタータの内から、原則として、合唱部分の多いもので、とくにわが国でも人気の高い名品を 50 曲、厳選することになりました。それらを、2000 年以降の私たちの演奏計画とも並行させつつ、順次、年に 10 曲ずつ刊行していき、5 カ年で完結させる予定です。

全 50 曲の内容と刊行予定(1 曲につき 1 冊)

2000 年…BWV 4、6、8、16、19、21、56、84、106、156 (内、56、106、156 は第 87 回定演の演奏曲目。16 は第 88 回定演で演奏予定)

2001 年…BWV 29、36、39、41、42、45、61、63、68、140

2002 年…BWV 71、76、80、104、110、124、131、150、190、196

2003 年…BWV 1、26、30、40、47、72、77、78、93、99

2004 年…BWV 116、123、129、137、147、180、187、192、194、197

原典と体裁、定価など

ドイツ・ブライトコプフ社のピアノ伴奏譜付きバッハ・カンタータ・シリーズ (Edition Breitkopf Nr.7000) を原典とし、ドイツ語と並列して日本語の歌詞 (大村恵美子訳) を載せました。その他の部分については、ほぼ原典どおりで、各巻末に日独の歌詞を対訳のかたちで掲載しています。

判型は、訳詞挿入スペースの確保のため、原典よりやや大振りの A4 判となります。頁数は 20 から最大 72 ページ程度。原典楽譜の輸入価格を参考にして定価を決めることとなりますが、1000 円から 2000 円の間を設定する予定です。

訳詞／大村恵美子

原典／Edition Breitkopf

編集・発行／東京バッハ合唱団出版局

製作／丸善プラネット株式会社

購入予約の受付

刊行を前に、さっそく購入予約の受付を開始します。

①<第 1 期 10 曲セット> : 予約特価 13,800 円

(予価合計 14,700 円のところで、送料込み。2000 年 5 月配本予定)

②<全 50 曲セット> : 予約特価 65,300 円

(予価合計 72,500 円程度のところで、送料込み。

2000 年より毎年 10 冊ずつ配本、2004 年完結予定)

代金を添えて、東京バッハ合唱団までお申し込みください。なお、予約特価の期限は、2000 年 4 月 30 日までとします。

バッハ・カンタータ愛好の方々には、ぜひとも全巻をお揃えいただきたいと願っています。

東京バッハ合唱団 ホームページのご紹介

バス 松尾 茂春

インターネットによるウェブ・ホーム・ページの開設も、今や常識的な事になってきました。すでに合唱団の多くがそのホーム・ページを通して、情報の発信、問い合わせ受付などを開始しています。そのような中、東京バッハ合唱団もようやく重い腰を上げて、最初の一步を踏み出すことができました。まだ試行前段階のまことに簡素なものですが、小さく生んで大きく育てるスタンスで、とにかくできる範囲で初めて、皆様のご意見、アイデアを募りながら進めていければと願っています。

当面の URL は

<http://www2.tky.3Web.ne.jp/~bach/chor> です。

Web ブラウザからここを選択するとメイン・メニューが（と言えるほどの種類もまだありませんが）表示されますので、後は、興味ある表題をクリックして該当ページを開きます。

□現在提供中のページ

- ◆東京バッハ合唱団 概要
- ◆東京バッハ合唱団 入団ご案内
- ◆月報 449号（1999年11月号）、450号（1999年12月号）、451・452号（2000年1月・2月号＝本紙）、453号（2000年3月号）・・・
- ◆リンク集（順次増やします）

□提供予定または検討中のページ

- ◆What's New
- ◆FAQ(よくある質問と答)
- ◆練習日程（急な会場変更なども極力反映）
- ◆演奏会案内
- ◆イベント案内（合宿、総会、創立記念会、旅行、クリスマス会等）
- ◆曲目解説（練習中の曲あるいは過去の演奏会の解説等）
- ◆技術解説（歌詞の訂正、演奏上の主要な諸注意を含む）
- ◆各係の一覧と役割

- ◆演奏会履歴
- ◆年間スケジュール
- ◆今後の長期スケジュール
- ◆楽譜、書籍等在庫一覧
- ◆邦語訳付きカンタータの出版案内
- ◆販売中のテープ、ビデオ（演奏会他）の一覧
- ◆ゼミ、勉強会等の成果、資料

ほかにアイデアがあれば、スタッフまでご一報下さい。

最初は華々しく開設されたホーム・ページであっても、ややもすればやがて提供情報の更新が乏しさから活気を失いがちな中、バッハ合唱団の場合、創立以来たゆむことなく発行され続けてきた月報をそのまま活用、掲載するだけでも最低限月1回の活性化が保証できることでしょう。まずはこの月報が私たちのホーム・ページの「ウリ」となり、この「ウリ」を今後は印刷費、郵送費、発送の手間なしでも世界中から参照していただけることになりるわけです。

見栄えの観点からは目下のところお化粧無しに近い実用画面ですが、いずれ御協力を得てデザイン面も工夫していく予定です。また英語版も開設予定です。音楽入りの画面（演奏会ライブからコラール程度の長さのもの）、質問箱なども検討中。スタッフ、協力者募集中（経験・年齢不問）ですのでぜひどうぞ。現在のスタッフはA.中山、T.大村、T.高橋、B.松尾です。

お問い合わせは

B.松尾 (e-mail : bach@tky.3Web.ne.jp)、または
合唱団事務局 (e-mail : bachchor.tokyo@aol.com
tel : 03-3290-5731 fax : 03-3290-5732) まで！

e-mail のアドレスを教えてください

電子メールについても、会社、個人共に普及が著しい今日です。合唱団関係の用途でも使ってよいというメール・アドレスをお持ちの方、ぜひ下記に e-mail でご一報下さい。一覧を作り、連絡等に活用させていただきたいと思っております。

バッハ声楽作品の全歌詞対訳 の仕事を一とまず終えて

——付録の仕事に喜びを見いだした——翻訳職
人の現場報告

杉山 好

日本語は世界言語史上かなり特殊で興味深い位置をしめる言語のひとつといわれているが、そうした言語世界に生きるこの国の同胞たちに、バッハとその音楽がいつそう深く親しまれて、その心の糧になるようにと願って、許されるかぎり精いっぱい努力と時間をかけてやってきた歌詞対訳の仕事が、1999年10月BACH 2 0 0 0の発行によって、一応の完結を見ることとなった。

1685年3月21日生まれ、満65歳4ヶ月と7日で地上の生涯を終えて1750年7月28日に世を去ったバッハの生涯のデータが、きっちりと区切れがよかったのにあやかっただのか、私の仕事も、日本コロムビアのLP盤《バッハ大全集》のカンタータ部門歌詞対訳でレコード市場デビューを開始して(1968年末)以来、ちょうど満30年を経過したことになる。

ふり返ればこの30年のあいだで、1975年と85年の二度にわたるライプツィヒのトマーナー合唱団の来日公演と、1979年と88年の同じく二度にわたるドレスデン十字架合唱団の来日公演の際に、《マイ受難曲》、《ヨハネ受難曲》、《クリスマス・オラトリオ》、《ミサ曲短調》の4大声楽曲をはじめ、その他の曲の歌詞対訳や楽曲解説を担当したのは、かなりハードではあったものの、忘れがたい経験や感銘であった。

しかしなんといっても持続的にたずさわったのは、日本のクラシック・レコード界にあって、山奥の清流のように絶えず生き生きと流れつづけるバッハ音楽であった。60年代後半のエラート・レーベルを飾ったF.ヴェルナーのカンタータ録音、地元ドイツのカンターテ・レーベルのW.エーマンやH.カールヘンファーその他のヴェテランの指揮する教会聖歌隊とH.ヴィンシャーマンを中心とするドイツ・バッハ・ゾリステンの名手たちが組んだカンタータ録音、それに加えて若き日のH.リリングのういういしさと細

やかでいてねいな恭々しさに溢れた好演ぞろいの世俗カンタータ・シリーズ(ベーレンライター・レーベル)を主とした上記コロムビア盤《バッハ大全集》に始まって、1975年にはアルヒーフ盤によるK.リヒターの《バッハ大全集》、そして生誕300年の1985年を目ざしての成立年代順によるリリングの全曲録音シリーズなど、それぞれに対訳提供のお手伝いをしてきたことになる。

∞

しかし、どのような御縁と天の導きによるものか、(ドイツ側の楽曲解説や演奏への指揮者のコメントをも含めて)全部私の個人訳で一貫する作業になったのが、今回BACH2000の第1巻から第4巻として収録されたBWV番号順による教会カンタータLP録音シリーズであった。テルデック(テレフンケン)・レーベルにより、N.アーノンクールとG.レオンハルトの(ドイツ以外の)両指揮者に万事を託して、1970年に開始されたこの全曲録音は、なによりも原資料の丹念な再検討と緻密な研究、復原古楽器による、歴史的考証をふまえた、またそのゆえにかえって新鮮な「現代性」(N.アーノンクール)にも逆説的に通じる演奏方針を一貫させることを特色とし、20年の歳月をかけて、1989年に完結にいたった。

当初テルデック・レーベルの日本での契約会社はキング・レコードであった。担当の福田稔ディレクターから依頼を受けたとき、私の念頭に明確に浮んだある考えがあった。それは原典復帰を志すこの企画の趣旨と精神にそって、まずドイツ語歌詞の校訂を私の手もとにある学問的資料にもとづいて厳密に行うこと(これにはかつてフンボルト財団奨学生に選ばれて敗戦の傷跡が外的にもまだ残っていた59~61年当時の西ドイツへの留学を可能にして頂いた日本のゲルマニストのお礼奉公の意味もある)、次に原詞に合わせる邦訳はできるだけ行対行で、音楽とことばを聴きながらすぐに対訳へ目を移せるよう工夫すること(ただしこの点は、独日両語のシンタクス[構文配列]の相違から邦訳行を原詩行と前後させる形での置換えを余儀なくされる場合もある程度避けられなかった)、また原詩で聖書からの引用が陰に陽にあるところでは邦訳の余白に出典個所を明記すること、さらにはそのままでは当然音楽にのせて歌うことのできない文意再現主眼の対訳ながら、せめて各楽曲の編成や形態ないし音楽的構造が目で見

てとれるよう、限られたスペースの中に許されるかぎりの作曲情報を盛りこむこと、そして最後には、ドイツで出版された最も信頼できる歌詞台本全集版（W.ノイマン『J.S.バッハ作曲の歌詞大全』[ライプツィヒ・1974年]とその前身のR.ヴーストマン&W.ノイマン『バッハ・カンタータ歌詞大全』[ライプツィヒ・1956年]）の先例と指示を承けて、ゴシック字体で一貫して強調されるコラル歌詞についても、その出典を余白に一々付記すること、などの釈義学的小よび文献学的措置であった。

このようにして、わが国のレコード出版史上で、あくまで付録にすぎない添付歌詞対訳（なかには原詞を全く省いて邦訳だけで間に合わせる例さえあった）に、だれが見ても編集者と印刷所泣かせ必至の最も面倒な注文のついた杉山方式バッハ歌詞対訳が、それも1~2年のことならいざ知らず、20年がかりの長丁場を見据えての一貫した学問的営みとしてスタートすることとなった。

幸いなことに、30年前当時には、オペラ関係のレコードの先例にも見られるとおり、付録資料に費用をかけて出来るだけ内容豊富で見た目も美しいセットものを制作しても採算がとれていた出版状況がまだ残っていた。そうした事情も手伝ってか、キング・レコードが上述のような要請を、（ポンと胸を叩いてか、それとも困惑に眉をひそめながらであったか、今では忘れてしまったが）、ともかくも納得して承諾を頂けたことは、筆者にとって喜びであった。日本側での出版権が、やがてワーナー・パイオニアそしてワーナー・ミュージック・ジャパンへと移った現在でも、当初にそうした歌詞対訳編集方針を受け入れて確立して下さったキングレコード社の福田 稔氏と協力スタッフの面々の功績と愛労を、筆者の立場から今あらためて特筆して感謝するものである。そこで確立された方針は、今回のCD大全集への付録資料でも、出版事情と形態の許す範囲内で十分に活かされていると信じる。

∞

さて私が教会カンタータや受難曲などで一貫してとってきた文語調の日本語訳について、年齢からいっても私より上ないしは同じくらいのバッハ研究あるいは音楽（史）学の先達がすでに口語訳にふみきっておられたのに、なにをいまさら時代がかった文語訳など、と訝られるむきもあることを承知してい

るので、この機会にひとこと弁明を記しておこう。このことには、じつは筆者個人の精神的転回というきわめて主体的な体験が深くかかわっており、暇をもて余した、ないしは教育現場での不満や退屈のうっぴんを晴らそうとする大学勤務の一語学教師の、文学的気どりの高踏的な筆のすさびなどでは決してないことを、まず理解していただきたい。

日本語の点では、富士山麓で登山者のための安全祈願を重要な仕事にしていた浅間神社の宮司を務めた曾祖父の家系に生まれ、幼少時から日本古来の祝詞を耳にして育ち、その上に祖父の枕元からこっそり拝借した講談本や落語集に横溢する江戸庶民の語り口や用語法（語彙）などが少年時代の文章語的教養として身につけてしまった前歴はおし隠すべくもない。

ともあれ響きの美しい昔の日本のことば以外には、ほとんど「まこと」を感じとれなくなっていた1945年前後（年齢では17歳前後）の田舎出の私の前に、さながら奇跡のようにルター訳聖書が立ち現れて、その雄渾、簡潔で、力強いリズムと生命力にみちたことば（ドイッチュ＝泥くさく逞しい庶民の）によって、たちまちに私のたましいをとりこにしてしまったのである。この出会いによって、私の中に先天的に（神主と教師のDNA因子!?) 封じこめられていた日本の（あるいは縄文時代にまでさかのぼるか）古言語層と、ゲルマン古代の調べを色濃く残しながら、この土の器に万民に普遍的に開かれた天来の恵みである福音のまことを、自分のたましいのことばとして有機的かつ具体的に盛りこもうとした宗教改革者ルターの聖書翻訳、そしてこれに連なるドイツ語コラルの言語世界が、自分でも分からない存在の根っこのようなところで、運命的に響き合ってしまったのである。

こうして独々辞典を横に置いて習い立てのドイツ語を「蘭学事始め」そのままの方法で暗中摸索しながらルターの聖書を読み進めていくうちに、そもそもキリスト教とは全く無縁な田舎の古神道の世界に育ってきた私が、戦後の思想的混沌と渾沌のただ中に投げ出されつつ、聖書の「まこと」との出会いに導かれたのである。この聖書体験と前後して、かねがね心酔していたベートーヴェンが自然に手引きして連れていってくれた先でのバッハ音楽との出会いがあり（弦楽四重奏曲へ長調 op. 135→管弦楽組曲口

短調 BWV1067)、こうしてルター聖書とバッハ音楽が私の内部で質的連続性をもって重なり合ったことは、今にして思えば以後の私の歩き方と仕事の方向を、本人の与り知らぬ間に決定するほどの重みをもつ内的なできごととなった。そのようにして、日本の(そしてまたドイツの)敗戦後3~4年の間にわが内面に生じた(geschehen!)、キリストの福音の力による精神的革命と方向転換(Umkehr=立ち返り、回心)が、良くも悪しくも、私のバッハ歌詞邦訳の通奏低音的基盤となったのである。

1952年春に大学の独文科を出てから3年余りたった頃、大学助手の薄給をはたいてなんとか入手した輸入盤ウェストミンスター・レーベルのH.シェルヒェン指揮による、当時としては最新の《マタイ受難曲》のレコード(1953年)を、地方の療養所に臥す信仰の友人やドイツの教会から派遣されてそこに働くドイツ人ディアコニッセ(奉仕女)に聴かせてあげたくて、自分の手で原語と対訳をガリ版に切り、謄写印刷と綴じを学生さんに手伝ってもらって、厚手のワラ半紙二つ折りの私家蔵版を作ったのが、J.S.バッハ(レコード)と杉山好(歌詞対訳)のコンビの事始めであった。

∞

今回のBACH2000のための校訂に際しては、《マタイ》と《ヨハネ》両受難曲、《クリスマス》と《昇天節》両オラトリオのそれぞれの聖書本文(福音史家の部分)を初めて杉山式口語訳に改めた。2000の数に象徴されるように、時代の大きな転換期に際して、ひとつの決定的な形で再評価と再復興(上演)の光が当てられることになったバッハ音楽の全貌。あくまでその蔭の付録にすぎない筆者の歌詞対訳と校訂も、21世紀を担っていく新しい世代の、人間らしい心と耳をもった人々に、なにがしかの参考や励ましになってくれればという、日本と世界の将来を展望する祈りと願いをこめての作業である。この大全集を手にする日本語圏のバッハ愛好の聴者諸兄姉よ、願わくば、この驚くべき真理と善と美の「大海」へのより深き、またより親密なるアプローチのために、筆者の拙訳を有効に役立てて下さるよう、理解ある御協力のほどを。また何らかの不備や誤りにお気付きのときには、ぜひ率直な御指示を下さるよう。

∞

最後に、この拙いながらも一所懸命にしてきた仕

事を陰に陽に励まして今日にまで到らせてくれた同学の先輩、僚友、そして後進たち、ことに齢70歳に達した筆者を気遣って、このような形で30年来の仕事の集成と補完を成し遂げるよう強力に推奨して下さいました磯山雅氏、そしてBACH2000日本版の編集責任者としてアンカー役を引受け、相変らずの編集者泣かせの私の作業ぶりに、理解ある献身的な協力と、率直で適切なアドバイスを惜しまれなかったワーナーミュージック・ジャパン鈴木徹太郎氏をはじめとするスタッフの方々に、心からなる感謝を捧げる。

1999年9月14日 古稀・^{ニイハオ}好生 記

(「バッハ2000日本語版特典CD解説書」p.34~40の全文を、筆者の了解を得て転載させていただきました。)

定期演奏会 初参加の記

一年生アルト 小栗 ミホ

「とうとう」歌いました、クリスマス・オラトリオ。私の場合は「やっとこさ」歌ったと言うのが正しい。何しろ、入団させていただいたのが公演まであと二ヶ月しかないという10月半ば。グループの飾らない雰囲気の良いさと、最低10回の練習がクリアできればよいという「甘言」に釣られ、見学させてもらいに行ったその日に入ってしまったのだった。それが、とんでもない無謀にして怖いもの知らずだったと知ったのは、同じ日に家で楽譜を再び開き、練習をしようとした時のことだった。なんと、音が取れないのである。多少譜面は読めるつもりでいたのだが、?十年のブランクは大きかった。頼みにしていたCDからも、アルトの音だけを聴き取るのは至難の業。愕然とした。一応、練習には参加しても、演奏会に出るのは辞退させてもらおうと、すぐに心に決めなのである。なにしろ腰痛と膝通と外反母趾痛と、三拍子そろった立派な言い訳もある。

何回目かの練習のときに、パートリーダーの方から、アルトのメロディをピアノで弾いたテープをいただいたときには、地獄で仏に出会ったような気持ち。家で繰り返し聴きながらの練習にも弾みがついた。

やれやれと思いきや、11月の初めに95歳の姑が突然亡くなった。その日まで健康でいてくれ、普段通りに晩御飯をいただいてからの大往生というのは、姑が望んだ通りの旅立ちで、むしろ喜ぶべきことだったかもしれない。お葬式も老人ホームの仲間、内々の家族とのお別れ会というだけの簡素なものだったが、お葬式はお葬式。疲れるものだ。まして片道二時間半の距離を、数日間行ったり来たりするのは、虚弱な身には（そうは見えないでしょうが）こたえた。日を繰り返してみると、演奏会の本番の日は四十九日の行事とも重なりそうではないか。やっぱり出演は遠慮させていただくのが賢明だ。そういう思いがいったんは頭をかすめたのであるが…。しかしである。この時はすでにバッハを歌う喜びに、ドップリ

はまりかけていたのである。

もちろんバッハは、前から大好きだった。その壮大な美しさ、深い精神性、複雑な音の構成などを、自分なりに楽しんでいたつもりだった。だが、自分の声で歌うことが、こんなにもバッハが身近に感じられるようになることだとは知らなかった。かねがね「音楽鑑賞」という言葉に胡散臭さを感じていたのは、対象を他者として距離を置き、聴いていたからだったのだろう。自分が歌う一呼吸一呼吸にバッハが息づき、血となり肉となっていくという感覚は、体験してみればじめて分かることだったのだ。もう、この喜びをあきらめる気はおきかなかった。よし、なんとかやれるところまでやってみよう。それには練習するっきゃない、せめて仲間の足を引っ張らなくなるレベルまでには。

それからは時間との勝負だった。限られた時間の中での練習は、職場の外階段の踊り場、家ではテープレコーダーの前と風呂場だった。風呂場は我ながらグッドアイデアだったと思う。ぬるめのお湯に半身漬かりながら練習するのは、時間の有効活用になる、声も楽に出しやすい、家人からのクレームもつかない、などなどのメリットがあった。大いに美容効果もあったはず???譜面はふにゃふにゃになってもいいよう、拡大コピーを用意した。練習場に数回テープを持ちこんで録音し、家で再生しながら練習したのも、先生の指示があらためて良く理解できてよかったようである。

本番前のオケ合わせのときは、気持ちが高揚しわくわくした。本物のオーケストラに合わせて歌うなんて、学生時代にメサイアを歌ったとき以来。それぞれの楽器の音色が空気をふるわせ、全身の皮膚を通し、心に染み入ってくる。耳だけで聴いていたCDとはまったく違う、という当たり前のことにつくづく感心したりした。特に好きなフルートやオーボエが、私の目の前の席で演奏されたのにはうっとり。

さて、12月18日の本番。もう感激のあまり舞い上がっていたらしい。先生から、クリスマスなんだから喜びに満ちて楽しく歌え、と注意されていたのにもかかわらず、最初はコチコチ。オーケストラやソロを楽しんで聴けるようになったのは、オラトリオ

の1番の合唱が終わった頃からだったろうか。終わったときには、ただただ、楽しく晴れやかな気持ちだった。あとで、招待した外国人の友人たちも、日本語が分からないながらも、クリスマス・スピリットが味わえ楽しかったと言ってくれた。

今、私にバッハを歌う喜びを与えてくれた「東京バッハ合唱団」という存在、ここまで引き上げてくださった大村恵美子先生の御指導、公演を成功に導いてくださった役員や関係者の方々の御尽力に、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。

皆様、来年はもっと上手に歌えるようにしますから、どうぞこれからもよろしくお願いします。そして、まだこの喜びを知らない音楽好きの友人たちにも味わってもらいたいと願っている今日この頃です。